開催地名	大阪府四條畷市
開催日時	令和８年２月 15 日（日）　10:10　～　11:20　講演後約 30 分参加者からの質疑に応答
開催場所	四條畷西中学校
語り部	松井　憲（広島県広島市）
参加者	自主防災組織 消防団 一般市民 市議会議員　240 名
開催経緯	市の防災啓発行事として年に一度、防災訓練は 12 月、防災講演会は２月から３月に 200～300 名想定で開催しているが、今年度は市民の防災行事の参加軽減を図るため合同で開催。大きな災害が少なく、市民の防災意識が低いため、起きてからでは遅い、起きる前になんとかしないといけないと感じて意識の向上をしてもらいたい。
内容	ーはじめにー 　実際に広島市豪雨災害を経験し、当時の惨状を二度と繰り返さないため、平時から防災意識についてもっと取り組む必要性を痛感し、その想いを次世代に繋ぐため広島市豪雨災害伝承館を設立し、たくさんの方々に防災について身近に触れてもらうため現在の活動に至る。 （１）広島市豪雨災害の発生とその惨状 2014 年８月 20 日未明、広島県広島市安佐南区・安佐北区を観測史上最大の凄まじい集中豪雨が襲い、壮絶な体験をした。ものの数時間で、１時間あたり 87 ミリ、24 時間で 247 ミリという猛烈な雨が降り注ぎ、土石流が発生して住宅街を飲み込んでしまった。この災害による被害は甚大で、死者は直接死 74 名と関連死３名を合わせ計 77 名にも上り、建物の全半壊も 400 棟近くに達した。被災した住民たちは、雷鳴と激しい雨音の轟音の中で命の危険を肌で感じたのである。 ・当時の状況 　被災当夜、9 時ごろから激しい雷が続いており、12 時を迎えると大きな雨粒が「バタンバタン」と大きな音を立てながら窓へと打ち付ける。４時間も轟音が絶えず鳴り響いていたので、心身ともに疲れ寝入ってしまった。明け方に妻に起こされ、外の光景を見て初めて異変に気づいた。外は静まり返り、周囲の道路やガードレールは 80cm もの土砂に埋まっており、何より匂いが平時とは違った。山から土砂が流れている状況も目の当たりにし、ヘリコプターの救助も今か今かと待ち侘びている人の光景を目にした。

	そんな状況下のため私どもも自宅から一歩も出られないまま約 14 時間、救助を待つか自力で脱出するかを迷ってしまい、精神的に追い詰められた状況となってしまった。常日頃から防災について考えることがなかったことはもちろん、生活できているから大丈夫などという思い込みから、正常な判断力を欠いてしまい早期避難のタイミングを逃した結果、自分や家族の命を危険に晒してしまうこととなった。 最終的には、腰まで浸かるほどの土砂の中を必死の思いで脱出したが、わずか数十メートルの距離を移動するのに土砂から足が抜けず動けなくなってしまい 10 分以上かかるという壮絶な体験をしたのである。 ・被害と経済的負担 災害は直後の被災体験にあわせて、その後も長期的に被災者を苦しめ続けるのである。住宅に入り込んだ土砂を取り除くのに数ヶ月を要し、その後も家の基礎の歪みや駐車場の倒壊、家電の故障が相次ぐことなどの被害が続く。これらの修繕費は数百万円に及び、被災から１年以上経っても経済的・物質的な被害は続いてしまった。 （２）被災後の心のケアとコミュニティの変化 災害は特にお年寄りと子どもに大きな影響を与えた。子どもはある程度、平時の生活が戻れば友達と遊んだりすることで多少、心のケアはできるのだが高齢者は違う。特に我々の地域では、大雨による土石流や流木を堰き止めるための砂防ダム建設計画のもと立ち退きが発生してしまった。住み慣れた地域を離れることになり、馴染みのあるコミュニティが崩壊する。その結果、高齢者が外出することを控えて孤立してしまい、認知機能の低下を促すケースも少なくなかった。 ・お好み焼きを通じた交流 そこで地域の誰もが気軽に集まって話し会える場所を作ろうと思い立ち、寄付を募って新しい施設を新たに立ち上げて、広島のソウルフードであるお好み焼きを赤字覚悟の低価格で提供し始めた。それが話題となり、孤独になりがちな高齢者を集めることに成功し、会話を楽しめる場を再建しつつ復興の支えになることができた。地域コミュニティの重要性を再度認識でき、心のケアが必要な時こそ人と交流することの大切さを実感した。 （３）復興への歩みと伝承への想い

	災害による絶望的な状況から這い上がるために、被災者自らが力を合わせて動き出した。みんなに二度と同じような辛い経験をしてほしくない、犠牲者を出してほしくないという思いから 50 ものプランからなる復興プランを広島市長に提言し、被災から 9 年後に広島市豪雨災害伝承館が設立された。被災者たちが中心となって活動する姿を非常に頼もしく感じた。現在では、被災者自身が指定管理者として運営に携わり、自らの言葉で教訓を伝え続ける防災活動を行っている。 ・広島市豪雨災害伝承館 実際に伝承館は、我々被災者から直接生の話を聞いていただき、展示やビデオを見て体験に近い経験をしてもらう。それを持ち帰り各自治体などで防災・減災活動に取り入れてもらうことをコンセプトに次世代への伝承活動を行う。日頃からのトレーニング、備えることの重要性を正しく伝える場所である。 （4）私たちが学ぶべき教訓 災害を通して、学ぶべきことは多かったが同時に犠牲にするものも多かった。何かを犠牲にしないためにも、被災者から直接生の話しを聞くことで、知識としての防災ではなく、命を守るための具体的な行動が取れるように意識改革が必要である。 （早めの避難、日頃からの備え、地域での声かけ）への意識改革を訴えている。 ・自分事として捉える 多くの被災者が、まさか自分のところで起きるとは考えておらず初期行動が遅れた。正常な判断ができ早期避難をしていれば、失うものも多くはなかった。災害情報など他人事だと思わずに、アプリやレーダーを活用して自分から情報を得る姿勢が重要である。 ・事前のトレーニングと避難先の確保 災害が起きてからでは遅く、冷静な判断をすることは期待できない。避難所だけでなく親戚の家や安全な知人宅など、複数の避難先を日頃から確保しておくことが重要である。そして何より、早めに避難する姿勢が命を守ることに繋がる。 避難の際に、お互いに声を掛け合える関係性や家族間での避難時のルール作りなど、日頃からの備えこそが、有事の際の自助・共助の鍵となる。今後も自

	助・共助・公助の連携を軸に、町全体で防災力向上のために継続性を持った活動を実施する必要がある 。 －最後に－ 　地震や水害などはいつ起こるか誰にもわからない。だからこそ来たる災害に対して誰もが自分事のように考え、日頃から備える行動をすることが大切であると考える。 □講演後 避難訓練の避難所運営ゲーム中、3・4 地区の自主防災組織の役員の方から質問（相談）を受けた。
開催地より	人が逃げない理由や、最終的には自分で判断する重要性に気付き、意識変革のきっかけとしてほしい。災害時の役割には行政と市民の線引き意識が残っており、円滑な運営のため双方が歩み寄ることが課題である。講演会を通じ、行政と市民の考え方の違いや必要な行動を共有し、両面から意識と対応の改善を進めていく。